

寡爲勝負云々とあり、鼈は土鼈にて、今すつぽんといふもの也、團魚といへるもこの物の一名なり、江戸の俗にフタといひ、京師の俗にマルといふも、もとすぽんといふは、かれが鳴聲のすぽんすぽんと聞ゆればなり、夫木集のかめのなくなるるといふ歌も、此をよめるなるべし、

〔視聽草 三集 六〕飲食闘會

文化十四年兩國柳橋於萬屋八郎宅、大酒大食之會連中拔群之分、書拔左之通、○中略

飯連 帝之茶漬茶わんにて、萬年味噌茶漬之香、物計、

一五拾四盃 唐辛五わ 三川島 和泉屋吉藏 七十三才 一四拾壹盃 小日向 上總屋儀右衛門 四十九才

一六十八盃 三左衛門 四十一才 右之外多といへども略之

鱸組

筋鱸 本郷春木町 一代金壹兩三分 淺草 吉野屋儀左衛門 中筋 一代金壹兩壹分貳朱 深川仲町 萬屋吉兵衛

同 一代金壹兩貳分 淺草 岡田屋千藏 兩國米澤町 八木屋善助 右之外略之

そば組 二八中盛 上そば 新吉原

一五拾七盃 桐屋五左衛門 四十三才 一四十九盃 淺草駒がた 鍵屋長助

一六十三盃 池之端仲町 山口屋吉兵衛 三十八才 一三十六盃 神田明神下 肴屋新八 四十九才

一四十三盃 下谷 御屋敷者 五十二才 八寸重箱二 一九盃半 豆腐汁三盃 小松川 吉左衛門 三十八才

右山岡子正より借寫

〔筆のすさび 三〕大食會 いつものころか、備後福山に大食會といふことをはじめしものあり、其社の人皆天折せり、ひとり陶三秀といふ醫者ありしが、これははやくさとりて其社を辭して、六十餘までいきたり、予が若き頃三秀が甚だ小食なるを見て、其よしを問ひしに、其社中皆異病にて